

# 東京バッハ合唱団 月報

[ 第 567 号 ] 2009 年 9 月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604  
Tel：03-3290-5731 Fax：03-3290-5732  
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.567

September 2009

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## < 速報 > 第 5 回ヨーロッパ演奏旅行

# “ 感謝と喜びに包まれて ”

大村 恵美子

### [ メール ]

送信者： Kichie Minami

日時： 2009 年 8 月 16 日 6 時 (日本 13 時) 24 分

宛先： Tokyo Bach-Chor

件名： 感謝と喜びに包まれて

皆様、無事帰国されたことでしょう。

今回の Stuttgart での 2 回の演奏会は、本当に言葉で言い尽くすことの出来ない喜び、感動、魅惑でした。Wolff 牧師が言った「奇跡」でした。しかし、その背後に、皆様の大きな努力があり、何も無い所から奇跡が起こったのではありません。

わたしは、昨日早速、協力くださった多くの人に、感謝のメールを送りました。今日、これから礼拝に出ますので、Wolff 牧師には、再び口頭で伝えます。

今回の感動は、わたしの生涯にとっても忘れることの出来ないものです。いや、Stuttgart に 3 年赴任したのは、今回の為だったと言っても過言ではないでしょう。

まずは、疲れが取れますように。

南 吉衛



シュトゥットガルト・パウロ教会での公演 (8 月 12 日)。団員たちはギャラリーをおりて正面で喝采をうける。中央はヴォルフ牧師。p.3 に演奏風景。

[ 写真：増谷啓氏 (パウロ教会員) ]

電子メールの時代となり、世界中どこにいても、即時に意思が伝わり、その同文がまた、同時に知らせたい複数の人にも配送できるという便利さから、旅行実現の前から、当事者間の連絡は、これまでになく緊密なものでした。

今年春の早い時期に、フライブルク・バッハ合唱団の若いメンバー 2 人が、東京の私たちをたよって練習場に現れました。8 月 9 日のフライブルク大聖堂でのミサ演奏当日は、そのうちのお一人、ジモーネが聴きに来られました。「東京バッハ合唱団が 8 月 9 日にフライブルク大聖堂のミサ音楽奉仕」という情報は、早くから広く知られていたのだという現実感が伝わってきました。

フライブルクのバス・メンバー、ヨアヒムは、昨夏の準備旅行の際に、大村 2 人の宿を、その 1 年前に申し出られ、それ以来ずっと連絡役となっていて、実際、ヴァカンスの最中にもかかわらず、ソプラノ 2、テノール 1、バス 1、計 4 名のメンバーが、8 日のリハーサル、9 日のミサ本番を共にしてくださいました。

ミサ後、ヨアヒムは、ご自分がオルガニストを勤めるコルマルの教会で、金澤亜希子さん (今回ツアーのオルガニスト) に、3 日後のシュトゥットガルトのための、長時間の自由な練習機会を用意してくださり、その間大村 2 人は、昨年お世話になったお母様のお家でもてなしていただきました。翌 10 日も、コルマルの美術館で合

1997 年の第 4 回以来、ドイツ側の受け入れの実力者アンメ牧師が死去されたこともあって、12 年も間隔のあいた今回の演奏旅行。団員の高齢化、突然の世界不況のあおり、その他いくつもの悪条件で、最終的に参加できたのは総勢 25 名でした。

ところが、懸念された一つ一つがまさに逆転、プラス要素となって、“地には平和 (Et in terra pax)” のメッセージを、10 日間に、日独双方の強い結びつきが目に見えるような形で実現するという、望外にすばらしい結果が生じたのでした。

私はここで、第 1 の速報として、人とのつながりだけを、ごくかいつまんでお伝えすることにします。いまは

流、昼食、リックヴィル観光まで付き合い、そこでお別れしました。私たちを迎えるために3日間中断していたプロヴァンスでのヴァカンスを、また続けるため、翌日早朝に発つとのことでした。

大聖堂での聖日ミサ演奏は、フライブルク・バッハ合唱団指揮者ボイアーレ氏が、ドームカペルマイスター(大聖堂楽長)ベーマン氏にとりついでくださったもので、それ以来、日本人でカペルマイスター秘書のシューマッハー西岡智子様が、メールで細部の点までご親切に相談にのってくださり、本番前日の8日、まず見学に寄った大聖堂の人ごみのなかで、私たちを見つけて、迎えてくださいました。

市内から5キロ離れた合唱団練習場を使わせてくださることになっていたのので、専用バスで探し当てると、なんと、そこにボイアーレ先生ご自身が、自転車でお迎えにいらっしゃり、中に案内されました。



自転車で現れたボイアーレ先生。左奥の木造の建物が練習場

合唱団メンバー4人がリハーサルに加わって、休憩にはたくさんの飲み物と手作りクッキー・自家製パンなどのおもてなし。練習は問題なく一通りあわせて、6時に終わると、近くの教会の鐘の音とともに、ふたたびボイアーレ先生が自転車で現れました。あしたは聴きにいきますよ、と飛び上がるほどうれしいお言葉でした。



フライブルクのメンバーも加わって記念撮影

9日(日曜日)9:00-9:45、ドーム広場をよこぎって大聖堂の対面にある付属音楽学校で声出し。秘書の西岡様の通訳をとおして、このときカペルマイスター・ベー



ミサ聖祭のなかで、バッハのミサ曲をうたう。指揮者の奥の白いガウン姿がカペルマイスター(楽長)ベーマン氏 [写真: 四方恭子]

マン氏が挨拶なさいました。

10:00-11:30、聖壇の正面左側に立って、キリエとグロリア、間を置いてサンクトゥスの合唱。すぐ近くで金澤さんがコール・オルガンを伴奏。また私たちを安心させ、励ますように、ひときわ背の高い、超ハンサムなカペルマイスターが立たれ、要所要所では伸びやかで美しいバリトンソロで会衆をリードされます。すべての典礼が流動的に進行し、会衆全体(後に800人ほどと伺いました)と音楽的にも一体となった、至悦のひとつでした。

ミサのあとでお会いした、この日の担当オルガニストも、私たちの選曲に合わせて、バッハのオルガン曲、それも関係深い調性のものをメインに全体をまとめたといわれ、私たちとの調和したひとときを、満足し、心から喜んでおられました。

直後に引き上げた付属音楽学校での、短いお茶の会には、たくさんの会衆も立ち寄られ、ボイアーレ、ベーマン両先生の、生き生きとした暖かい歓迎のおことば、世界平和の実現を担うこのような演奏を、これからもお待ちしますと、将来の期待まで述べてくださいました。



挨拶をされるベーマン先生と通訳をされる秘書の西岡さん(左端)

ボイアーレ先生は、ひきつづき前の広場のテラス席で、ビールとピッツアの昼食まで気さくに一緒にしてくださいました。ヨアヒムとお母様、ジモーネたちも同じテーブルで、先生に東京からお土産にお持ちした、何十枚もの日本の四季の大判のカラー写真(バス団員の千葉さん





左からヨアヒム、ボイアーレ先生、金澤さん、ヨアヒムのお母さん、そして筆者（右端）

撮影)を、一枚一枚注視、アマチュアの写真とは思えないと、みなさん感嘆しておられました。

合唱を共にした4人のフライブルクのメンバーにも、アルト団員小野さん手づくりの優雅な佐賀錦のブローチやペンダント、京扇子、絵はがきなど、団員の方々が日本からお持ちした記念品をお渡ししました。

翌10日は、ライン川をブリザックの橋でわたってフランスに入り、リックヴィルでヨアヒムと別れたあとは、ツアー一同、専用バスでアルザスのワインルートを北上し、ストラズブルに16時着。旅程作成上、やはり、もしこの地でもコンサートをするとしたら、1泊では無理で、市内見学だけに絞ったのですが、それすら夕方と翌朝だけの最小の時間をあてるのがやっとでした。今回は着いてすぐ、そのままのバスで、むかし私の留学生活の圏内だった地域で降りてもらい、第1回ヨーロッパツアーのときに演奏した改革教会や、私の住んだ学生寮(シュヴァイツァーも館長をしたことがある)など、徒歩で外から見てまわっただけで(修理工事のところも多く)、予約していた近くのレストランで、名物のシュークルートを味わいました。

11日、朝食後すぐにカテドラル界限を見学。11時、専用バスで独仏国境のライン川をふたたび渡り、ケール経由でドイツに入りました。この橋(今は、ヨーロッパ統合の象徴として、ヨーロッパ橋と名づけられている)は、今春オバマ大統領たち、各国の首脳が歩いてわたったというので、一躍有名になりました。

ツアー中お世話になっている専用バスのドライバー、ブルーノさんは、ケールの町の住人で、その際のオバマさんたちの話を愉快そうに解説してくれました。

私にとって、とりわけうれしかったのは、ブルーノさんが、ストラズブルも熟知していて、前日もこの日も、大学正面広場の青年ゲート像を、遠くから通じている大通りを直進して、間近に見せてくれたことです。

私の住んでいた学生寮から大学への通学路は、運河沿いに往復するだけだったので、運河を直角によこぎって大学の堂々たる表玄関と正門のゲート像を見られたのは、今回が初めてでした。また近年にいたって、欧州議会議

事堂を中心にEU関連の諸機関の建物がこの一帯に設計され、今もまだ進展中で、国際都市ストラズブルの新しい重要な一面も、今回はじめて知ることができました。なつかしい留学の地が、昔の面影をそのままに保存しながら、現代の最重要な役割も演じつつあるのを知って、誇らしく感じました。

夏休みの真っ最中、しかもこちらの滞在時間はあまりにも短いので、今回はどなたにも連絡をするのを遠慮しました。

11日午後、いよいよシュトゥットガルト。まっすぐ宿泊先のムターハウスに到着。南先生のお迎えをうけて荷をおろし、パウロ教会でリハーサル。終了後、ヴォルフ牧師と南牧師をお招きして、レストランでの夕食。

この日は、打ち合わせがあれこれあるものの、まだ事情が飲み込めないような中途半端な感じ。パウロ教会聖歌隊の方々のリハーサルは、彼らのなかにお勤めの方も多く、19時からになるとのことで、私たちの練習には、指導者のクルツ先生だけがいらして、テンポなど要点のとりきめをし、私の解釈を了解して下さるにとどまりました。あした本番前の2時間だけで、いっさいを決着させようという、綱渡りです。

12日、パウロ教会コンサートの日。午前は各自が自由に気持ちや体調などを整え、16-18時リハーサル。全部を1回通し、細部のとりきめ、パートごとの出入りなど、即決、即決で本番に臨みました。どちらのコーラスも20数名ずつで約50名。あちらは学生から高齢者まで多彩です。



パウロ教会では、後方ギャラリー上のオルガン前面で演奏。前段に東京パッハ合唱団の団員、後段にパウロ教会聖歌隊の団員、合わせて3段に並んだ。



多くの聴衆は、両側面の補助椅子と祭壇(写真の背後)に陣取った。

[写真: 上2枚とも増谷啓氏 . p.1 に関連写真]

演奏後、ギャラリーから聴衆の正面に全員が降りてきて、私が挨拶し、そのなかで、聖歌隊が全員で東京に、というのは無理かもしれないけれど、個人的に日本を訪れる方があったら、またいつでも一緒に歌いましょう、と呼びかけました。

場所をかえてパーティがあり、お客様もたくさん残られ、いま歌い終えたばかりの聖歌隊員もおもてなしに回られて、飲み物や軽食をふるまってくださいました。

打ち上げで二重合唱モテット“Singet dem Herrn ein neues Lied(歌え 主にむかいて 新たな歌)”を歌い合おう、という提案は、あちらでは練習不充分気味で、省略するかという懸念もあったようですが、コンサート直前のリハーサルでとにかく1回とおして実績をつくり、パーティでは、両合唱団員がこぞって、最後のクライマックスのフーガ部分“Alles was Odem hat, lobe den Herrn(讃えよ 生命あるものみな)”を、声のかぎり歌って、満足しました。乗りのよい、すてきな相手でした。昨年いっしょに原案を話しあったヴォルフ牧師夫人と「最高のインプロヴィゼーション(即興演奏)でしたね、とにかく全曲いっしょに歌いましたものね」と抱きあって喜びました。

13日、ムターハウスでの、最後のコンサート。お客様が、外部からも続々と集まり、補助椅子を切りもなく出しつづけて、超満員。ここでは、私も始めに挨拶をし、昨日とちがって、あなた方も日本にいらっしゃれたら、と将来の期待を語れない相手(65歳以上の隠退したディアコニッセ=奉仕女の、終の棲家なので)を思って、ゆっくり、低いトーンの声ではじめました。この今の時が、神の国へのあこがれを共有するひと時なのだと、実感をこめてしめくりました。とても大きな拍手で、おどろくほどでした。

今日は、一人の援軍もなく、フライブルク、シュトゥットガルト初日を経て、はじめて自力のみの演奏。会衆からよく見えるように正面で、視覚的にも美しくと、心がけました。オルガン、フルート、ソプラノ独唱も最高。合唱も落ち着いて、すべてに心をこめた、ひとに伝わるしっとりとした演奏となり、アピールも強かったようです。なかなか演奏後も帰らない聴衆との会話も長びいて、みんな大きな得心のうちに、最後の日も終わりました。

## 演奏旅行募金 目標額 達成!

多くの皆様の熱いご支援に心から感謝申し上げます。

2009年8月25日現在

【ヨーロッパ演奏旅行募金】	3,836,788 円	(目標 300 万円)
旅行経費支出	3,531,717 円	
差引残額	305,071 円	

(残額は、記念文集の作成等に充てさせていただきます)

## 第5回ヨーロッパ演奏旅行参加者(abc順)

(2009年8月7日~8月16日)

指揮	大村恵美子	A	鈴木 敬子
独唱(S)	光野 孝子	A	高野 京子
フルート	山田恵美子	A	恒松 恭子
オルガン	金澤亜希子	T	大村 健二
S	荒井せつ子	T	島津 欣矢
S	平岡ジャウ	T	谷沢 守
S	柿沼 徳子	B	加藤 剛男
S	松尾 文子	B	松尾 茂春
S	菅原 昌子	B	宮城 幸義
S	高谷公和子	B	森永 毅彦
S	豊田富士子	B	白井 均
A	本橋 みつ	B	菅間 五郎
A	白井 昭子	添乗員	四方 恭子

フライブルク大聖堂ミサ(8月9日)

・Kyrie .....ミサ曲ト短調 BWV235

・Gloria.....ミサ曲ト短調 BWV235

・Sanctus .....ミサ曲ト短調 BWV232

(オルガン:金澤亜希子)

フライブルク・バッハ合唱団 演奏参加者

S Ragini Joshi	T Andreas Kautsch
S Gertrud Keil	B Joachim Baumann

パウロ教会礼拝堂コンサート(8月12日)

・教会カンタータ第8番 „Liebster Gott, wenn werd ich sterben“ 1)合唱, 4)アリア(バス斉唱), 6)コラール

・宗教歌曲(ソプラノ独唱:光野孝子)

BWV446 „Der lieben Sonnen Licht und Pracht“ 第1, 9節

BWV507 „Wo ist mein Schäflein, das ich liebe“ 第1, 7, 8, 9節(うち第7, 9節テノール斉唱)

BWV479 „Kommt, Seelen, dieser Tag“ 第1, 2節

・教会カンタータ第131番 „Aus der Tiefen rufe ich, Herr, zu dir“ (日本語演奏:東京バッハ合唱団)

・教会カンタータ第191番 „Gloria in excelsis Deo“

(フルート:山田恵美子, オルガン:金澤亜希子)

シュトゥットガルト・パウロ教会聖歌隊 演奏参加者

S Susanne Hämke	A Barbara Stroh
S Elisabeth Leßmann	A Elisabeth Tosta
S Margit Nadj	A Heike Tscheschner
S Stefanie Sturtz	A Marianne Wolff
S Christine van de Moosdeijk	T Michael Eiberger
A Hiltrud Baur-Büche,	T Michael Klein
A Ingeborg Hoke	T Linus Schindler
A Barbara Kärcher	T Godefridus van de Moosdeijk
A Elisabeth Köhler	B Jörg Einsfeld
A Luitgard Nuß	B Matthias Grausam
A Gisela Priesener	B Gerold Grimm
A Katrin Schenk	B Wolfram Steinmayer

(合唱指揮者 Chorleiter: Dieter Kurz)

ムターハウス礼拝堂コンサート(8月13日)

8月12日と同プログラム

東京バッハ合唱団の単独演奏